

編集後記

＜川井 啓市＞

本号の主題は比較的古いかもしれないが、新しい観点から、新旧の著者の力作が集まり、全体として通覧していただければわかるように、一つの主張の流れがみられる。座談会・各論から始まって序説へと逆読みするのもよい。もともと学会シンポジウムのテーマではあったし、誌面でゆっくり読む楽しさがある。

X線検査と内視鏡検査のかかわり合いに関する白壁教授・竹本教授の序説は、その意味では現在の結論ともいえるものであろう。

ところで診断率の比較が問題となる時、一般に少数例での正診率が問題にされることが多い。重要なことは、少数例であればあるほど、陽性率・陰性率・偽陽性率・偽陰性率を明らかにして更にその検査法の特異性と感度をみることによって、問題点を掘り起こすことである。

本号とは関係ないが、将来の問題はスクリーニング、精密検査の各々において、どれだけの特異性と感度を必要とするかの基本的な討論がないままに、技術論の展開にならないように気をつけたいものである。

＜編集＞ 早期胃癌研究会